

paint には更に描画以外の応用面が示唆されるようであった。なお我々の研究は実験対象が少く、幼稚園児は入園当初であり決して夫

々のグループを代表するとは云えないであろうが今後この仕事を拡張し追求して行きたい希望である。

Personality projection in the Drawing of the Human Figure. (CA Methode of personality Investigation)

By Karen Machover

姫路工業大学 釘 宮 冴 子

この書の著者は、New-York 市における Lings County の Brooklyn College 精神科研究科講師で同時に Long Island 医科大学の臨床精神科の Instructor でもある。ここに紹介する人物画による Personality Projection Test はかつて Goodenough が人物画を描かせそれによって児童の知能を測定しようとしたそれ自体の発展と本来的には見なしてよいもので、児童の Personality を検診するための Projective Methode として利用された一つの試みであるといえよう。即ち著者は人物画を描かしてその描き方を解釈してゆくという方法で、人格分析の一つの方法と概説せんと試みてゐるもので一九四九年の初版である。

人物画を描くことにより Projection される自己表現の伝達機関としての body image に次の如き理論的根拠をあたえている。画像もしくは自己は、あらゆる行動の relevance に最も緊密なポイン

トを有しており、人間の成長過程に於いて種々なる感覚器管の感知が個人的な経験から生じた如く、描画に於いても或程度の個人の形態や容姿ものにおいて本人自体を導き出すに相異ないし、換言すれば一人の人物画を描くことは body image の或る投射を含みながら描く本人の要求、葛藤などを表現するための自然を伝達機関の役割を果すということである。この様にして画像の解釈が成巧すれば、描かれた人物の形は本人自身の歩き振りや筆跡その他各種の表現的がな運動が物語と同じ種類の親近性をもつてその個人と密接に結びついているという仮説が成立する。この書における Personality analysis の技術はそれら自己投射の主なる特長を確立しようとして試みなのである。この様な理論的根拠としての考察に其他描かれた人物画がどの様な点で明確に常変らず被験者自体の具体的な人格構造に結びついて表現されるか、どの面が意識的な自己欲制と変容性

に属してたものであるかという投射恒の常性の問題、更に描画の行為における被験者自身のコンディション及び心理的業張が無意識的にその最後の作品にどの程度まで表われてくるものであるか等について著者自身の実験では次の事柄が指摘される。即ち特に感情の高低や集中的傾向と素質が画像のモードに或種の公式化をもたらすものではなからうか。更に描画に示される心身相関の問題、投射された描画における象徴的価値の問題に心理学的データの根拠が認められるし、このことは又描画における動機付けの機能的基礎についても以上の仮説が実証されるケースは無数にある。

Instructionとしては、被験児に8.5×11描画用紙三枚、鉛筆(3B)消しゴムをあたえ、誰でもよいから人物を好きなようにかいて下さい」と指示し、描画中被験児の態度や画の順序など詳細に観察する。描き終つて人物画が男であれば「今度は女の人をかいて下さい」と女性を描かせ、最初女性像を描けばその逆の画性を描かせる。特に幼児においては、「お母さんを描いてごらん」「お姉ちゃんを描いてごらん」など特定の人を指示しないで「誰かをかいてごらん」と漠然というのがいい。

ここで聯想が重要視される。即ち自分に対する態度や他人に対する態度を色々な方向から聞くのである。こゝでInstructionとして「今描いたこの人について作話がお遊びの人物のようなつもりで話を一つ作ってごらん」といって例えば「この人結婚しているの?」「幾つ位?」「職業は何?」「この人の最も良い点は?」「どうしてなの?」「この人の最も悪い点は?」「どうしてなの?」(是等はMacho ver Figure Drowing tur (Child)の記入用紙に記載され

ている。)と被験児の性的態度や社会的態度を聞いてゆくのである。即ち聯想が診断的、治療的な目的に使用される場合、その個人に特別な問題に適應されるし、その画が明白に同一化を示さない時の説明にも求められる。

結果の説明、診断

この様にして描かれた人物画は、密接に被験児の衝動、不安、葛藤、代償的特性と関係するものであるという仮説に基づき診断が進められ描画解釈の原理として、①頭、②顔面(表現、口、唇、顎、眼、肩、耳、毛、鼻、頸、咽頭)③接触部(腕と手、指、脚、脚指)④身体各部(胴、胸、肩、臀、腰廻り、解剖学的指標、身体各部の縫目)⑤衣極(着立って目立つボタン、ポケット、タイ、靴と帽子)⑥構造的、形態的部分(テーマ、動作、接続、均斉、中心線サイズと配置、構え、遠近、線の型)⑦葛藤指標(消したりした箇所、明暗)⑧男性像と女性像の描き方の相異⑨年令による相異等について分析説明を試み人格診断の目的達成に努めている。

次に実際に取扱われたケースについて描画解釈の詳細を遊べるべきであるがここでは紙面の都合上省略しておく。保育学会の性質上、特に八才児男児のケース、スタイを取上げて説明したが、注意すべきはかかる Proegcine Methode 一般に通じることとしてその方法的科学的実証性は極めて慎重を期さなければならぬこと、単なる量的経験や常識論の域を出ない解釈上の困難性を考慮に入れて、臨床的な技術のみに終始することなく理論的根拠の設定は今後多くの実験に俟たねばならない。